

荒井智行「デュガルド・スチュアートの救貧思想と貧困対策
——スミス以後の貧困問題を中心に」

『経済学史研究』第53巻1号, 2011年7月

デュガルド・スチュアート(1753-1828)は、アダム・スミスの伝記を最初に書いた人物、あるいはトマス・リードとともにコモン・センス学派の第一人者として知られるが、19世紀初頭の経済学の権威者でもあった。本論文は、スチュアートが1800年から1810年にエディンバラ大学で行なった「政治経済学講義」を拠り所として、特に「貧困対策」——スミスが『国富論』で明示的には論じなかった問題——についてのスチュアートの見解を整理し、その特徴を明らかにする。スチュアートの貧困対策それ自体を本格的に扱った研究がほとんどない点、単なるスミス経済学の後継者というイメージを払拭する点において、本論文は高い独創性をもつ。明確な論旨を維持しながら、限られた紙幅の中、他の著者——スミス、ヤング、イーデン、ベンサム、マルサスなど——との類似性や相違も丁寧に論じられており、さらには、救貧法の変遷や児童労働の実態など、制度的・歴史的背景についても目配りが利いているなど、全体としてバランスのとれた完成度の高い論文であるといえる。

著者によれば、スチュアートは、スミスとは異なり、むしろジェイムズ・スチュアートと同様に、凶作や穀物価格高騰時に貧民を救うため、「公共の穀物倉庫」の設置を提案した。この提案は、1579年のエリザベス法や1698年の救貧法、18世紀のスコットランド最高裁判所の議論の背後にある救貧思想への賛同から生じたものであった。しかしながら、一方で、救貧法の

限界——財政負担と貧民の怠惰をもたらすこと——も認識していたし、18世紀ブリテンの大都市で展開された慈善救貧院の事業にも反対であった。

スチュアートは、スミスが認めた分業の弊害に強い関心をもち、さらには、現実問題として、工場における児童労働の問題、および大都市に溢れる孤児と極貧の子どもたちの問題にも取り組んだ。彼は、工場労働の改善に努めたデヴィッド・デイルのニューラナークの木綿工場を称賛するとともに、都市部における孤児院の設立を提唱した。その他、本論文は、スチュアートが、労働者のための貯蓄銀行の設立、監獄システムの改善、賃金の漸次的上昇を提案したことを例としてあげながら、彼が短期(緊急時)と長期の両方の視点から多様で具体的な救貧対策を構想していたことを論証する。

このように、本論文においてスチュアートは、スミスの『国富論』の成果を受け継ぎながらも、「スコットランドにおける伝統的な社会習慣との深い関連のもとに」貧困問題を捉えた人物として描かれる。分業や資本蓄積、および自由貿易を通じた富の増大によって貧困が全般的に解決されることを期待しながらも、そのプロセスから漏れる人びと、あるいはそのプロセスの故に貧困に陥る人びとをどのように救済するか。スチュアートは現代にも通じるこの問題にいち早く気づいていた経済学者だということになる。

経済学史研究の視点から見れば、本論文に

よって、分業と資本蓄積にもとづくスミスの経済学と、人口法則と収穫逦減法則にもとづくマルサスやリカードの経済学をつなぐ重要な経済学者としてスチュアートを位置づけることが可能になったといえる。このような視座から、彼の経済学と道徳哲学の関連、スコットランドにおける伝統的な社会習慣との関連、さらには同

時代人との関わりを明確にすることができれば、スチュアートに関する斬新で有意義な研究書へと発展させることができるだろう。著者の今後の活動に期待したい。

2012年5月26日

経済学史学会
学会賞審査委員会